松下昇出立後に関する
～刊行委の討論断片

「・・・・・・この号を含めて９６年以降は具体的には何も刊行しない可能性があったし、これからもあり続けていくであろう。」

（概念集・別冊２―あとがき）

Ａ―松下が出立してから二年半、この預言に遠くまで包囲されながら、今、どのようなヴィジョンが明滅しているのだろうか。

Ｂ―〔死後の経過は〈松下〉の新たな段階における仮装組織論の展開である〕と、ぼくは受け止めてきた。大学闘争後責任と同等の比重で事態は推移している。

Ｃ―関係者の多くは松下との交流の記憶が〈過去〉に収束しつつあり、内在的な〈現在〉へ繋留されているわけではない。そのことを連絡の窓口を引き受けようとした経過から感じさせられている。

本当はまだ誰も出会えてさえいないのだ。こういう言い方は伝わりにくいだろうが、松下のカリスマ性を強調したいのではなく、〈死〉によって関係者自身の来歴や生涯的テーマがいっそう根源的に問い返されているのであり、問い返しの深度とその記憶との距離感は、今後、各自の表現過程に微妙な偏差をもたらすだろうと思っている。

Ｄ―関連するかどうか分からないが、交流の深さ浅さに対するひとりよがりな錯覚や、ほめられた記憶を起点に他者との違いを強調したりといった傾向は自分の中でも生じやすいよな。

松下からの批判は、〈　〉～〔　〕過程の厳しい関係認識の位置から共闘者に対しても率直に発せられたが、批判対象の可能性への信頼と同時に、通い合えない言葉の乱流に一人屹立せざるを得ない悲哀が底流していた。一方、相手の可能性を発見した時の賛辞には子供のような驚きと喜びを隠さなかったな。批判と賛辞は真逆に見えつつ実は同一の根から発しているのではないかと俺は思ってきた。

Ｂ―晩年まで何らかの交流がありえたことも、刊行過程の継続を考えたりできる位置も、単なる幸運、もしくは松下の展開に希薄な関わりしかできなかったからではないかと考えてみるべきだろう。また、闘いの過程で離れたり、何らかの齟齬が生じて言葉を交わすことが不可能になった人たちの実存の重さを受感し再検討する位相をくり込むことで、初めて自分も彼等と松下に対等である。

Ａ―ところで、松下昇追悼集の企画は実現するだろうか。当初「菅谷規矩雄追悼集」の水準はとても保てないという理由から、「追悼集」として可視化するのは困難であるという意見と、その現実を踏まえつつ何らかの可視化を試みるべきだという意見に引き裂かれたままであったけれども・・・。

Ｃ―量的には、数冊分のパンフに匹敵する追悼表現が各地に集積している。誰かが註を付しながら集成すれば、巷の追悼集並のものは可視化できるだろう。しかし、それで何かが終わり、そして始まるだろうか。

D―松下はパンフの刊行自体を目的化したことはなかった。不確定な情況への回路を切り拓く過程で、パンフという仮装も採ったのであって、俺たちに望んでいるのは無論その過程の独自な継続だ。方法の模倣や水準の保持など不可能である。

　それと、真面目に焦ってばかりいる俺たちに今もっとも欠けているのは、松下がどんな厳しい情況のなかでも持っていた〈遊び〉の感覚だぜ。死が俺たち自身の現実となるまで、彼と〈かくれんぼ〉していると思えば、辛気くさい追悼集など必要ない。大学闘争と文学に引き裂かれ、思想の奈落で早世してしまった菅谷の復活を願う松下の場合と俺たちの場合とは全く違うんだからな。松下は今も俺たち以上に生の側に〈非〉存在している。むしろ、無言によって追悼されているのは俺たちの方だ。

B―君の言うことは分かる。ぼくらを含む多くの関係性の動向自体が、相互的な追悼過程でもあり、追悼を超えていく〈遊び〉への変換過程でもあるということもできる。自分の考えも君に近いが、死後に発生したいろいろな松下論は、松下昇（についての）批評集に包括されるべきだろう。そういうものとしてパンフ化する意義はやはり発生しているのではないか。一方向的なパンフではなく、未だ無い関係性を幻視し、その渦中へ資料化していく根拠はあるのではないかと思う。

A―その作業を含めて、「誰が、いつ、どこで」という問題についてはどうなんだ。

B―個人的に決意表明して始める気はないが、すべての〈私〉がすでにそれぞれの場で開始しているし、機が熟せば一斉に可視化するだろう。

D―「機」のキーワードは何か。

B―〈〈〈〈〈〈〉〉〉〉〉〉

C―なんだか禅問答みたいになりそうだから話しを戻そう。自分の場合、〈松下〉という磁場からいきなり虚空にほおり出された感覚で、この二年半もがいてきた。連絡の媒介と思って、住所の分かっている方々に発送した「報告」の内実に関して異和や批判が一周しているようだ。

A―力量の問題はともかく、君の「報告」は腰がひけているというか、ある種のあいまいさを感じていた。作成段階での位置取りや情念についてもう少し説明してくれないか。

C―力点は、〈遺志〉の確認と、〈遺志〉に応えようとしている関係性の動向を概略的に示し、〜刊行委テーマの共有を提起することだった。取り上げた幾人かの表現については、関係者の動向を表す媒介として極力敬意を払って扱いたいと思った。関係性の広がりを見出すには、即応的な差異の固定化ではなく、個々の主体との持続的な接点を見い出すことのほうが重要だと考えていた。限界はおたがいさまだからね。しかし、結果的には、率直な批評の欠除や動機のあいまいさを感じた人もいたし、それとは逆に党派的な硬い印象を持った人もいたようだ。

A―それで、君が得ている総括的なヴィジョンは今あるのかな。

C―一点確認しておきたいのは、「松下の残した表現～資料群は一般的な相続物件ではない」ということだ。かりに相続権をめぐる紛争が発生した場合も、～刊行委は紛争当事者をメンバーとして包括していかねばならないだろう。

　それはまた、誰もが～刊行委へ自発的に、かつ大衆的な協議をになう責任において参加し、彼の〈著作権〉や～資料群を応用できるということでもある。〈遺志〉は黙示的に新たな運動性の提起を込めており、この判断を乱暴あるいは一方的と受け取る人は松下とつき合ってきたとは言えない。

D―「遺族の立場を無視している」という反感が生じるのは必至かもしれないな。しかし、「～刊行委は松下とともに終わる」という発想が生前の呼びかけによって超えられている以上、Cが述べたような方向と異なる意見があるなら、協議の場を設定しつつ開示すべきだろう。むしろ、遺族の方角から〈遺志〉に沿った運動原則が出てくるのが理想なんだが、「より近しい者が持つ死角」という視点も欠かせない。〈外部〉からの影響や思い込みや未消化な心情の誘惑から俺たち自身も自由とは言えないからな。選ぼうとしている手段が松下の表現過程の死活にとってどんな意味や方向性を持つのかを考え、相互に助言～協力しあっていくというのが基本だ。

A―この間底流している情念や混乱の根が少し見えてきた気がする。関係性の多様な反応をどう捉えていくべきかも。

C―〈死〉がもたらした磁界の混乱が沈静化していくにつれ、各主体を大学闘争や松下と出会う以前の視座へ引き戻す力がより強く作用しつつあるのを感じている。しかも、彼の事績を前にあれこれ論じながら、心のどこかに、全てを放棄しても許されるような大きな空白がある。「私がいなくなればみんなほっとするでしょう」という生前の呟きはこういうことだったのか。

　「死んでから～刊行委を名乗るのは不遜な便乗だ」とか、「松下理解の深さと表現の貫徹という基本において、お前は条件を欠いている」といった、〈私たち〉から〈私たち〉へ投げかけられる批判は、批判主体の位置を批判対象へ反転させつつ〈遺志〉と向き合って見るとき、格闘すべき真の岩盤に触れられるのかもしれない。

D―相互批判に開かれない閉鎖性や自己弁護のための言いがかりは論外だが、俺たちに対するネガティブな反応が、そいつにとって避けられない絶望～断念の現れだとしても、はっきり絶望～断念する逃げ道を俺たちは許されていない。あいまいさを抱え込んだ不確定な断面からの出立が誰にも平等に開かれた〈不〉可能な飛翔契機ではないかと、今は言っておくほかないだろうな。

B―良くも悪しくも、これらの関係性の動向総体が今の～刊行委の実態であり、そう名乗っている者だけの問題ではない。何らかの形で〈松下〉を扱い、あるいは語ることが、この世界のシステムや幻想性構造の何とどのように衝突することになるのか、時は迫っているけれども領域や形態は無限に開かれている。全ては自由であるとして、それぞれ内心の声に従う時、明確な対決軸の展開としてだけでなく、死者やまだ生まれない者たちとも興じるにふさわしい〈遊び〉の原初性に歩み出ていきたいものだ。できれば松下のように・・・。

～一九九八年九月～の日記を再構成　　仮装被告団～刊行委員会